

特別助成 東日本大震災の被災者を元気づける事業（東日本大震災復興関連）

## 「雄勝石の再生をめざして～中学生と作家たちの石絵展～」事業

### 震災被害地へ復興に向けたエールを送る 100年前の雄勝石をキャンバスにした石絵

東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻市の雄勝町は、すずりやスレート屋根の原材料となる雄勝石（玄昌石）の産地として知られていた。この雄勝石をキャンバスにして絵を描く石絵によって、被災地の子どもたちを元気づける活動に取り組んでいる「雄勝石絵教室実行委員会」では、宮城県の中学生とアーティストたちが制作した石絵の展覧会を開催した。



仙台市で開催された石絵展



キャンバスは廃校となった学校の屋根に使用されていた雄勝石のスレートを使用

#### 雄勝石を使った石絵の普及活動を行ってきた雄勝石絵教室実行委員会

雄勝石絵教室実行委員会では、貴重な資源である雄勝石を地元の子どもたちに知ってもらい、それを産業としてきた郷土の歴史や伝統に誇りを持ってもらうとともに、情操教育の一環にしたいという趣旨のもと、石絵作家の齋藤玄昌さんの指導による石絵教室を展開してきた。

まず、2009年に雄勝小学校と蔵王町の宮小学校の児童による石絵壁画「太平洋と金華山」、「蔵王連峰とお釜」の制作を行ったが、残念なことに雄勝小の子どもたちの壁画は、東日本大震災の津波によって流されてしまった。そこで地域復興の願いを込め、もう一度、子どもたちと一緒に後世に残る石絵作品を作ろうと、2012年に雄勝石復興プ

ロジェクトに取り組んだ。これは、2012年に完成した東京駅の新駅舎の構内に、被災後に地元に残った大須小学校・中学校、雄勝小学校・中学校などの児童・生徒108名が富士山をモチーフに描いた石絵を飾るというもので、その年の9月には東京駅で除幕式が行われた。この2つの事業に、AJOSCの助成が活用された（詳細は年間報告書2009年版、同2012年版参照）。

「大震災から5年が経過しましたが、被害が大きかった雄勝町の復興は遅れています。そこで、昨年、復興の加速化や雄勝石の事業の再生への願いを込め、宮城県内の子どもたちに石絵を描いてもらい、それを展示公開する事業に取り組むことにしました」と、実行委員会の菅井哲夫委員長は話す。

#### 宮城県内の中学生と地元作家が雄勝石の石絵を制作

今回の事業には、県内4地域7校の中学校（仙台市／蒲町中・将監中、石巻市／雄勝中・大須中・山下中、岩沼市／岩沼中、登米市／登米中）の美術部を中心とした生徒125名に加え、宮城県内で活動している画家やアーティスト60名も参加した。

「キャンバスとなったA4サイズほどの雄勝石のスレートは、約100年前に建てられて廃校となっていた小学校分校の屋根に使われていたもので、震災の被害を免れたものです。石盤草の選定保存技術保持者の佐々木信平さんが所持していたものの提供を受け、汚れや傷の除去などの下地処理を施し、車に積み込み、指導の齋藤玄昌さんとともに中学校を回りました。中学校では部活動や授業の時間を使い、約2時間の時間をかけて生徒たちに思い思いの

画題で絵を描いてもらいました。アーティストの方々にもそれぞれの分野で作品を制作してもらいました」と、実行委員会の伊深久男事務局長。

完成した石絵作品は、すべて額装され、仙台市の東北電力グリーンプラザ（9月29日～10月4日）、石巻市のかほくホール（10月13日～20日）、登米市の高倉勝子美術館（10月23日～30日）、岩沼市のエピックビュー（11月10日～15日）で展示された。見学に訪れた人からは、「作品が欲しい」、「自分もやりたいが石材はどこで手に入るのか」、「子どもたちのみずみずしい感性に感動した」といった声が寄せられたという。今後も実行委員会では、子どもたちと一緒に何らかの形で雄勝石を使った活動を続けていきたいと、決意を語った。



県内4地域7校の中学校の美術部中心に125名が作品を制作



展示会のパンフレット

#### 助成団体: 雄勝石絵教室実行委員会



#### 復興のシンボルとして雄勝石を活用した活動を継続していきたい

3回目の助成をいただき、大変感謝しております。子どもたちをはじめ、県内の方々に雄勝石の魅力を知っていただくことができました。小さな活動ですが、地域にとって大事な活動だと信じています。2017年に新設予定の雄勝町の小中学校でも、雄勝石の石絵を使っていただけるよう運動していきたいと考えています。応援をよろしくお願いいたします。

雄勝石絵教室実行委員会  
委員長 菅井 哲夫さん(右) 事務局長 伊深 久男さん(左)